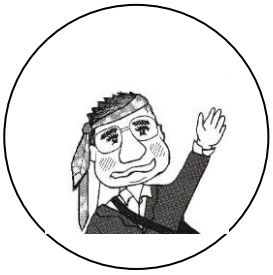
大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第３マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

霧が覆い隠すシッキム王国の〝神秘〟（12）

プラナイさんの得意ワザの前に、ルムテック僧院について語らねば話がすすまない。

ルムテック僧院

カルマ・カギュ派総本山。かつて初代王プンツォー・ナムギャル王がユクサムへ行く時ここに逗留した。それを記念してゴンパが建てられた。その後 1956 年まで廃墟のようになっていた。

第 16 世カルマパ（ランジュン・リクペー・ドルジェ）は、チベット動乱（1959 年）でシッキムに逃れてきた。廃墟のゴンパに止住しながら、そこから約２キロの屋根の上に、チベットのツルプにあったカルマ・カギュ派の総本山を模して、1962 年にルムテック・ダルマ・チャクラ・センターを建設した。ネルー首相は衣服や食事などを援助した。

山門を入ると中庭があり、儀礼のときは仮面舞踏などが催される。中庭本堂の後ろは、山の斜面の階段状に僧院が連なっている。学僧の修業の場、寮、図書館、食堂などがある。チベットから運ばれてきたタンカや仏像が保存されている。第 16 世は米国で没したが、遺体は空輸され、1981 年に僧院で火葬に付された。その遺骨は黄金の仏塔に安置された。

大学もありベナレスのサンスクリット大学と提携している。

さて、プラナイさんの得意ワザとは、「特別室で高僧に合わせて上げる」ということであった。彼の叔父さんが高僧だそうである。ところが、10 月 17 日は満月の法要で高僧がいないことが判明した。彼は申し訳なさそうに、「奥の院に入るか？」と聞いてきたが、わが輩は断った。これはわが輩のミステイクで、特別室には貴重な品々があった。惜しいことをした。

プラナイさんの長男はこの僧院で修業していたが、今は別の寺院で修業している。スマホに映った顔からすると 17 歳程であろうか。なぜ僧になったのか、と聞いてみた。

「高僧の意向に従って僧になった。本人も同意した」

長男が僧になると、だれが家族の面倒をみるのか、と聞くと弟がいるから心配ないということであった。家の継承より、僧として修業している息子を誇りとしているように思えた。

ところで、第 17 世には二人のリンポチェ（転生の僧）がいる。互いに正統性を主張していた。Ｕ・リンポチェとＴ・リンポチェである。Ｕはダライ・ラマ猊下認可だが、性的問題を起こした。Ｔは 2017 年幼馴染と結婚し僧位をすてた。Ｔの方が性的問題を起こすより自

然といえる。二人共少年のころより転生の人として仏教に励んできた、というより輪廻転生のレールの上を歩む道しかなかった。それでも、中国のチベット侵略がなく、チベットで生きていれば、地上界の汚濁にまみえることもなかった、とわが輩は思う。前世の高徳のリンポチェも、現世の西洋的な欲に負けてしまう。彼らは来世のとき、どの国を選び転生するのだろうか。

時間が余ったので、ビュー・ポイントに行こうということになった。車で５分ほど上がったところにイスだけの展望台があった。写真を撮る気にもならない普通の谷間風景がみえた。振り返ると、岩壁窟に二体の像が安置されていた。長い髪で裸形に近いミラレパ像（1040-1123）と正しく僧衣をまとったカルマ派第２祖ドルプチェン・カルマ・パクシー像（1204-1283）である。それでわが輩のテンションがあがった。

第２祖は神童といわれ、わずか 10 歳で仏教哲学と瞑想に長けていたとされる。パクシーは優等生だったが、ミラレパは若いころは「殺人者」として知られていた。

7 歳のころ父が亡くなった。叔父叔母が財産を乗っ取った。苦境に陥った母は親族を憎みその怨みを託して息子が僧になるように頼んだ。ミラレパは復讐のために黒魔術を学び多くの人を殺した。のちに自らの罪を悔いて師マルパについて修行した。師は彼にタントラの秘術、シッディ（成就法）を教え、洞窟やヒマラヤ山中で瞑想するように伝えた。

1970 年代中頃より「精神世界」ということばが目につきだした。書店にいくと「精神世界」コーナーなるものがあった。ヒッピー運動やニューエイジ運動（自己意識運動）とも関連していた。本棚にはアーチャリヤ・ラジニーシ（インドの教祖「和尚」）、神智学会のブラヴァキー夫人、チベット仏教の本などが並んでいた。そのブームの一翼を担ったのが、おおえまさのりであった。一時カリスマ的な存在でもあった。

彼は『ミラレパ：チベットの偉大なヨギー』を出版した。わが輩は書店でその本を手にして、ペラペラとめくったが、すぐに元の場所に戻した。おおえの翻訳が気に入らないとか、チベット仏画風の装丁が気に入らないとかではなく、あの当時はただチベット仏教に興味がなかったし、社会から浮き上がった「自己意識」や精神世界に関心がなかった。意外とわが輩は普通人なのである。

おおえはニューヨークで映像の仕事に携り、1971 年にインド・ネパールを旅して帰国し、『チベットの死者の書』（1974）を出版した。わが輩も同じ頃インドでヒッピー生活をしていたが、おおえと出会うことはなかった。『チベットの死者の書』も一時評判になったが、わが輩が手にとることはなかった。なぜかといえば、「コカ・コーラ」の匂いを感じたからである。

チベット画家ミエさんが、新しい訳本が出版（1989）されたので良書だから読めといってきた。ミエさんはシャンティニケータン大学に留学したが、殆どダラムシャーラー（ダライ・ラマ法王のいるダラムサラ）に入り浸っていた強の者である。その人が勧めるのだから、間違いなく、コーラ味ではなく、はったい粉（ツァンパ＝チベット人の主食）味だろうと思い、早速読んでみた。

はたして、新訳本はコーラ味か、はったい粉風味か、それとも第三の風味か、以下次号に。